

明治のナショナリスト・金子彌平

両親は、息子の「右傾化」に文句を云はなかつた。むしろ、低迷し続ける学業成績を心配してみた。しかし、これは、思想が原因と云ふより、怠惰のなせる業であつた。

赤尾敏に関心を抱いた小学生は、同時に、宮脇俊三の鉄道紀行を愛読しており、中学校に進学してからは、高校入試がないのを良いことに、学科の勉強などせず、日本全国を鉄道で巡つてみた。(余談ながら、昨年六月には、大井川鉄道の井川駅で、国内旅客鉄道の全線乗車を果たした。)だが、そんな旅の途次で、思はぬ副産物を得た。

一浪後の京大受験が終わつた後、父に誘はれ、東北地方に出掛けた時のことである。金子家の系譜を調べてみようと思ひ立つた二人は、花巻市役所を訪ねた。本籍は、祖父が東京に移すまで、同地に存在してゐた。戸籍係を煩はせながら、明治初期にまで遡つて、数通の除籍謄本を手に入れた。

その中に、「金子彌平」といふ名があつた。曾祖父(友之助)の兄に当たる人物で、曾祖父と満州で事業をしてゐたらしい。当時の認識は、その程度だつた。

だいぶ経つてから、大学の図書館で、暇つぶしに人名事典を開いてみた私は、我が目を疑つた。「金子彌平」といふ項を見付けたのである。出身地・生年月日とも、除籍謄本の記載と同一であつた。間違ひない。

調べてみると、この記述は黒龍會編纂の『東亜先覺志士記傳』を下敷にしてゐることが分かつた。さらに、父を通じ、疎遠気味だつた親族に連絡を取つてみると、福澤諭吉や松方正義などの自筆書簡が遺されてゐた。折しも、学部の卒業が近づいてゐたので、それまでの研究成果をまとめて、『金子彌平—ある明治ナショナリストの軌跡—』と題し、卒業論文とした。

その後も、いくつかの新史料が見つかるなど、研究は少しづつ進展してゐる。この場を借りて、その一端を紹介したい。

金子彌平は、ペリー来航の翌年—一八五四年の一二月に、現在の岩手県花巻市で生まれた。金子家は、近江系の有力商家で、南部藩から苗字帯刀を許されてゐたといふ。明治維新後の一八七二年の春に単身上京して、福澤諭吉の書生となり、翌年の五月には、慶應義塾に入るが、福澤の回想には、「その来るや他人の紹介あるに非ず、始めて相見て初めて相識り」と記され、押し掛け書生に近いものだつたやうだ。卒業後は、郷党の先輩・東政図に触発され、清国北京公使館通弁見習として大陸に渡り、種々の活動を試みたと云はれる。

帰国後は、支那語の学校を設立するなど、支那語教育における先駆的役割を果たす。また、我が国で最初のアジア主義団体とされる《興亞會》(一八八〇年三月発足)においては、幹事として活躍。加へて、支那研究者でもあつた宣教師・S.W.Williams の大著・“The Middle Kingdom” を抄訳し、『支那總説』の書名で刊行してゐる。

その一方、農商務省を経て大蔵省に奉職。語学力を買はれてか、一八八四年五月末から

一年半ほど、米国に長期出張を命ぜられもする。大蔵省の実力者であつた松方正義の知遇を得たのは、この頃だらうと思はれる。

けれども、官僚生活に飽き足らなくなつたのか、一八八八年一月に大蔵省を退職。その後、日清戦争が始まると、占領下の営口に赴き、同地の民生支部で会計課長などを歴任。三国干渉後は、新領土の台湾総督府に勤務し、総督の乃木希典を扶けたと伝へられる。

一八九八年一月に台湾総督府を退職した後は、事業家に転身する。前述の友之助らと共に、《金福洋行》といふ貿易会社を興し、旺盛に事業を展開。日露戦争が始まると、安東市の市政準備委員長を委嘱された。遺された書簡からは、大隈重信、藤田傳三郎、久原房之助といった政財界関係者のみならず、救世軍の山室軍平や支那学者の内藤虎次郎（湖南）などを含んだ幅広い交流を窺ひ知ることが出来る。

そればかりではなく、一九〇七年頃からは、田中智學の日蓮主義運動に共鳴し、智學が《国柱会》を組織（一九一四年一月）すると、初代の京都局長として力を尽くす。《国柱会》と云へば、宮澤賢治や石原莞爾も出入りしてゐた。賢治も花巻の出身だが、兩人が言葉を交はす機会があつたのか…。

彌平は、関東大震災後の一九二四年二月に七〇歳でこの世を去るが、その生涯は、心中に「内なる日本」を背負つた典型的な明治人のものであり、末流にあたる者として、その事蹟を広く知つて頂きたいと思つてゐる。